

⑨ 森村市左衛門の作品寄贈

昭和十九年、男爵森村市左衛門（七代目）から左記の油画および水彩画計十点が本校に寄贈された。

裸婦	(油画)	原	撫松筆
雨後の牧場	(同)	同	
森村市左衛門の寄贈書には「牛のゐる風景（岩崎弥之助男所 有）のコッピイ」とある。			
ヴァイオリンを弾く男	(同)	同	
横向婦人像	(同)	同	
使徒パウロ	(同)	同	
森村市左衛門の寄贈書には「男の肖像」とある。			
老婦人	(同)	同	
野遊び	(同)	和田	英作筆
バックingham宮殿前	(同)	牧野	義雄筆
テームズ河畔	(水彩)	同	
母子	(油画)	フロラ・ライオン筆	

森村市左衛門のメモ帖（福永郁雄氏提供コピー）によれば、寄贈願いが出されたのは十九年五月五日（本校文庫台帳登録は同年七月十九日）のことである。市左衛門は空襲による焼失を恐れて高輪の自邸に置いてあったこれらの名品を本校に寄贈したのであって、原撫松の作が多いのは森村邸に撫松のアトリエがあった関係によるが、一点だけ寄贈しないでおいた撫松の森村市左衛門（先代）肖像は十九年五月二十三日、二十九日の両度の空襲で家とともに焼失した。右の十点は危うくその難を逃れたわけである。

⑩ 学校工場化

昭和十九年七月十一日、文部省は決戦非常措置要綱に基づく学校工場化の具体策について諸学校に指示を出し、学校を軍需物資生産工場に転用することとした。次いで同年十二月三十日に通牒を発し、敵は航空工業の壊滅を企図しているため、航空機工場を極力学校校舎に分散することが閣議で決定されたので、航空機関係のものを優先して校舎転用を行い、転用は学校の半分を目安とし、生徒をその工場に出勤させるべしと指令した。かくて本校内にも航空機関係の工場が作られ、生徒はそこへ動員された。また、二十年二月以降、八島玉仙寄贈の土地は陸軍被服本廠が借り上げ使用することになった。

⑪ 美術品の疎開・終戦前後の文庫

空襲による被害が予想されたため、帝室博物館や美術研究所では既に美術品の疎開を進めていたが、本校でも昭和十九年の六、七月、上野直昭校長と東京都西多摩郡小宮村養沢の住民との間に建物賃貸契約が結ばれ、直ちに文庫の重要美術品の疎開が行われた。貸与者は次のとおりである。

小宮村養沢五八番地	池谷	良助
二階建土蔵	建坪八坪七五	一棟
同	六六番地	池谷 精一
二階建土蔵	建坪四坪	一棟
同	二二四番地	谷合 昇
二階建土蔵	建坪八坪七五	一棟

いずれも賃貸料は一カ月五十円、二十年四月契約更新以後は八十円であった。

終戦前後の文庫については本書別巻『上野直昭日記』や次の資料が参考になる。

戦争末期から終戦直後の美術学校文庫

前田泰次（東洋工芸史）

私が東京美術学校に就職したのは昭和十九年の夏で、上野直昭先生が校長の時であった。その時の私の身分は文庫主任の助教で、金工史の講義も担当していた。私の金工史は香取秀真先生の後を受継いだ事になる。当時の美術学校文庫と云うのは、図書館と美術館を兼ねたもので、その館長を文庫課長と呼んでいたが、私の就職当初は館長空席で、間もなく田中喜作先生（日本美術史）が課長として迎えられた。

その頃は大東亜戦争も末期的症状を呈し始めた頃で、講義出席する学生も少なく、時には館長室を利用して金工史をやったりもしていた。文庫の仕事は一般の閲覧や模写をさせる片方で、貴重本や貴重美術品を安全な場所に疎開させる事であった。

〔煉瓦造り〕庫は現在も残っている赤煉瓦建三階と、渡り廊下でつながったコンクリート二階建の二棟で、閲覧室と事務室は木造ペンキ塗二階建の明治風建築であった。一間幅の入口の左側が小使室と便所、便所の前が事務室入口、その間の狭い廊下を突当ったところが閲覧室で南北西に窓があり、北側は二階に上る階段となる。二階には模写室があった。

煉瓦造倉庫の一階が書庫で、洋書と和漢書とがギッシリといっぱいで、新本を入れる余地を探すのに苦労した。二階が工芸品や日本画類や貴重本の庫、三階に洋画と工芸品の一部を収蔵していた。〔煉瓦造り〕コンクリート倉の一階が模本類の棚で、二階に彫刻類が詰め込んであった。この三つの建物グループはいわゆる工芸科側にあつて、道をへだてた本館側に二階建洋館の陳列館と正木記念館があつて、ここでは常に美術品を陳列していた。

これだけの所帯を賄うのに職員は館長以下小使までで七人位であつた様な気がする。但し会計的な事務の責任は美術学校会計課にあつて、我々の会計的な仕事は新購入品を帳簿に記入する程度であつた。つまり本や美術品の整理・保管・貸出が仕事の主体であつた。但し教職員や学生に対する閲覧指導と相談にはかなりの時間をさいていた様に記憶する。

私が美校にやってきた時は、美校大改革のあつたすぐ後で、改革前には白川一郎さん（洋画家）や鎌倉芳太郎さん（現在は染色家、当時は日本美術史を担当）が文庫の仕事を手伝っていたと聞いた。また学科の若手教官が文庫の仕事兼任することの歴史も古いらしく私の知る限りでは石沢正男さん（現大和文庫館長）が文庫主任で日本工芸史を講義していたし、新規矩男さん（現教授）も矢代幸雄課長の下で文庫の仕事を手伝っておられた時代があつた。これら先輩の後を私が引受けた形であつた。

館長である文庫課長と云うのは、位の高い教授がなされる習慣だったらしく、私が入る以前では矢代幸雄先生や香取秀真先生もなされておられた。前に申した様に、私が入って間もなく田中喜

作先生が課長になられたが、たしか二年足らずで亡くなられ、以後脇本楽之軒先生と藤田亮策先生（戦後）の二代の下で主任をつとめ、やがて御役御免となった。

そこで戦時中から終戦直後の時代の文庫の有様をふり返ってみよう。近頃少し頭がぼけてきたので、記憶違いがあるかも知れない。文庫入口のすぐ前に防空壕を、小使の朝倉さんと一緒に掘った。名前を忘れたが若い女性の事務員で、すごく肝っ玉のすわった人がいて、敵機が上空にやっけてきても防空壕に入らず部屋で椅子に座っていた。私も又、死ぬ時は死ぬものだど覚悟をきめていて、防空壕には入らず、彼女と二人無言で対していた。それでも上野駅近くに爆弾が落ちた時には、二人とも飛上るほど驚いた事を記憶している。彼女はなかなかの美女だったが、これまたなかなか美男で立派な学生と恋仲となり、職を離れていった。

戦時中だから、若い働手の男子が使えず、女子職員に力仕事をさせざるを得なかった。若いお嬢さん二人をつれて、小使さんと私がつれ添って、青梅の奥までリックをかついで貴重品を疎開しに行った事もあった。また小使の朝倉さんに大八車を曳かせ、私が後押しをして、大切な本をお隣の美術研究所の書庫に運び込んだこともあった。これは美術学校文庫の書庫の屋根が木造瓦葺だったからであった。食料のない当時に、すきっ腹で本や美術品を移動させるのは楽でなかったが、今思い起こすと、それはむしろ面白味のある思い出としてよみ返ってくる。

田中喜作先生は心の暖かい方であった。珍本稀本の所蔵でも有名で、大森の御宅にも度々御邪魔した事があったが、先生は疎開

先の山梨の田舎で亡くなった。喜作先生の所へはよく梅原竜三郎先生（当時教授）が遊びに来られ、課長室ではなく、我々の事務室で雑談をされるのが屢々であった。おかげ様で梅原先生の面白い御人柄の一面に接することも出来た。裕伊之助先生（当時助教授）も時々文庫に見え、雑談を好まれた一人であった。

一週間の内、必ず何度か本を見に来られたのは彫金の清水南山先生であった。老先生を私は以前から存じ上げていたので、私の方からも教室の方へよく伺い、彫金技術等についていろいろの知識を頂いた。鍛金の石田英一先生も時々文庫へ見えたが、先生とは食堂の昼食時に雑談をすることが多く、これ又面白い思い出となっている。先生を私はノンキのトウサンと隠れて呼んだが、本当は神経の細やかな方であった。食堂での雑談では、建築の大家の大沢三之助先生からもいろいろ教えられた。

新先生（現図書館長）は戦時中は陸軍々属になって居られて、金の星章をつけた国民服姿で登校（当時は時間講師か）されていた様な気がする。文庫にも時々顔をお出しになっていたから、よく時局についていろいろ雑談をしていたが、或る時私が、この頃の軍部の発表はあてにならない、空襲されるときとその後で何十機撃破とか何とか云っているが、国民は本気にしない。「ホントにそうならウレシイネ」と云う歌になっていますよと申上げる時、あの謹厳な先生が、「前田さん!! そんな事を口にするといへんですよ!!」ときびしい顔で忠告して下さったのが、今でも目に浮ぶ。

後藤年彦さん（後に彫金助教授）も一時文庫で働いて頂いた。

それが戦争末期の何時頃からかは記憶が明らかでない。実に誠実に働いて下さり、文庫で一生を送るにはおしい方と思い、海野清先生の時代に（南山先生の次の彫金教授）彫金科の助教になつてもらつた。その後藤さんの文庫での仕事の一つは、いろいろな図録から面白い模様図柄を模写する事で、模様の参考カードを学生に利用させようと計画した。しかし予算の裏付けのないこの様な仕事は完成するわけもなく、二三百枚の模写カードが出来たところで終止符を打った。

連合国に負けて、アメリカさんが文庫にもよく見学？ に来る様になった。刀があつたら見せろと云う連中が多かつた。日本人の通訳がついてくるのだが、彼等もアメリカ軍の一員の如く我々に対して、威張り散らすのには参つた。GHQの美術係の人達も次々にやってきた。今私の頭に残っているのは、シャーマン・リー氏とホリス氏である。彼等の前か後かに何とか云う陶器研究者が係りでやって来たが、この方はたいへんおだやかで、戦勝者面をしなかつた。

シャーマン・リー氏が来た時には、正木記念館や陳列館の床がガタガタになつていて、陳列などの出来る状態ではなかつた。リー氏の云うには、何故に早々と床を修理して陳列をせぬかと、私を責めるが如くなので、それならGHQが修理してくれたらよろうと云うと、彼はそれについては何も云わず、ケースの下に収めておいた工芸品を、あれこれ觀賞して帰って行つた。

戦争末期から暖房用燃料にこと欠く様になり、ストーブや火鉢で燃やす物のない時も多かつた。学生が外から木の枝や、板塀を

こわして持込んで来ることも屢々。我々も庫の中でやや不用と思われるもの、例えば古い新聞や古教科書類を持出して、暖を採ることも少くなかつたが、燃した古教科書や新聞も、今になると貴重資料のような気がして申わけがない。

疎開の荷物が帰ってきたので、ついでに倉の整理をすることに、帳簿との照合なども始まり、品物の塵はらい——何十年も前の塵のかぶっている物も多かつた——も始めてみたが、人数不足と腹ペコで、とんとはかが行かなかつた。帳簿に記載されていて現物のない物も多数にある。後になって分つた事なのだが、終戦後に或る不幸な事件があつて、二三の美術品が持出されたことがあつた。私の記憶にある宋赤絵の碗二個などは、倉から姿を消してしまつた。それでもあの大戦争で敗れた事を思うと、文庫の犠牲は極少ですんだと云えるかも知れない。

文庫の便所の横にカリンの木があつて、大きな黄色の実を沢山につけたが、これを取る人は殆どなかつた。もいで机の上に置いておくと、誠によい香りがする。砂糖があれば信州でやる様にカリン漬にするのだが、砂糖も焼酎もないから、ながめるより他に手がなかつた。終戦の後には事務員の新採用も行われ昭和二十年の十月頃に、良家の御嬢さん然とした高橋さんや、坊やの領域からまだ抜け切らない久松さんと泉さん（何れも現在、図書館、資料館の中心人物）が入つてこられた。この方々も確かカリンを机の上に置いて、その香を楽しんでいた筈である。

明治風の木造閲覧室はなかなか味のある建物で、二階に上る階段の手摺など立派なものであつた。机と椅子の高さの比率が、本

当の読書用には少しく不向であったし、机が大形であったのは、読書よりも絵本を見たり、挿絵を引写しするのに便利に設計されていたのだろう。

本の挿図の切取りは昔からあったようで、すべての図版にカラ印を押ししたりして、あれこれと頭をなやませた。しかしあの頃は、本を丸々持って行かれると云う事は少かった。今は普通の大学図書館では、一年に何%かの本が盗まれるのを計算に入れて運営するのが通例だと云う様な事を耳にすると、日本の大学生も地に落ちたものだ、なげかわしく思われる。

戦後の図書館の運営にはアメリカのシステムが導入されて、いろいろ進歩している様であるが、近頃の図書館は何となく御役所然としている。昔の文庫は素人のお店の様なもので、間の抜けた物であったが、それなりの暖かさがあって、先生、図書館員、学生の社交の場でもあった様な気がする。組織は進歩するのだろうか、退歩するのだろうか。

〔図書館ジャーナル〕第六号。昭和四十九年、東京芸術大学附属図書館。数字は漢数字に統一した。〕

⑫ 東京美術学校改革

昭和十九年五月、文部省は突如本校改革を断行し、校長および教官の更送を行なった。これは明治三十一年の所謂美校騒動以来の大きな変革であった。その経緯を記す。

改革前史

一、美術振興調査会の答申

文部省が改革を断行する契機となったのは、美術振興調査会の答申であると考えられる。既に述べたように、文部省は年を経るにつれて沈滞しつつあった帝国美術院を真に権威ある機関に立て直すため、昭和十年に在野の有力作家を加えて新たな組織を作った。それは松田文相による突然の改革であったため美術界に大きな動揺をもたらし、翌十一年の平尾改組は問題をさらに複雑にしたが、同十二年に至り、帝国芸術院設置と文部省美術展覧会（新文展）開設によって一応の收拾がついた。この大騒動に懲りた文部省は、以後美術行政の長老たちを顧問に置き、常に協議しつつ事を進めることにした。長老といえは先ず正木直彦だが、その正木の日記に顧問の会が設けられる経緯の一端が記されている。

〔昭和十二年六月十五日〕……午後五時伊東（延吉）文部次官來訪ありて昨日の夕刊に藝術院の事曝露され迷惑致居る 併し其方面に進み居ることなれば御諒解願ひたし 尚文部省の美術行政に付省内には此方面に堪能なるものなければ顧問として長老の人々 清水澄 松浦鎮次郎 貴下 岡部長景子 細川護立侯の五氏を煩わしたしとおもふ 御承引を乞ふといふ

長老の一人、細川護立についても『美術年鑑』（昭和十四年版。美術年鑑社）に

〔同年同月十九日〕細川護立侯は伊東文部次官に招かれて文部省